

巻頭言

この日本でユダヤ人伝道を
どうしてもしなければならない理由

翻訳者、元ハーベスト・タイム・ミニストリーズスタッフ 佐野 剛史

この日本でユダヤ人伝道を行う必要があると言うと、関西風に言うと「なんで？」というような顔をされる。そう言う人の気持ちもわかる。人口の1%しかクリスチャンがいない日本で、日本人伝道も進んでいないのに「なんでユダヤ人伝道？」と思うのも無理はない。ただ、これは人の教えではなく、聖書の教えである。聖書は、どの地を宣教するにしても、ユダヤ人伝道を真っ先に行う必要があると教えている。この点をみことばから確認したい。

1. 宣教の原則：To the Jew first

ユダヤ人宣教に関する原則について、ローマ1:16は次のように語っている。

私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です（新改訳）

ここで残念なのが、上記の新改訳も含め、どの日本語訳も原文の意味をうまく伝えていないことである。新改訳の訳を読むと、原文の意味が伝わらない。その点、多くの英語訳は原文に忠実に訳している。

For I am not ashamed of the gospel, for it is the power of God for salvation to everyone who believes, to the Jew first and also to the Greek (NASB)

この英文をもとに日本語に訳すと次のようになる。

私は福音を恥とは思いません。福音は、まずユダヤ人に、そしてギリシヤ人（異邦人）のために与えられた、信じるすべての人にとって救いを得させる神の力です（佐野訳）

つまり、「福音はまずユダヤ人に伝えるもの」という意味になる。ただ、そう言っても「どちらの解釈も成り立つのではないの？」と思う人がいるだろう。しかし、「使徒の働き」でパウロが実際にどのように宣教を行ったのかを見ていくと、そうではないことがわかる。

2. 原則の実践：使徒13章以降

「福音はまずユダヤ人に」という原則が実際に実践されているかどうかを確認する資料として、使徒パウロによる本格的な異邦人宣教が始まる使徒13章以降を取り上げる。

パウロが最初に向かった先は、サラミスという町である。

サラミスに着くと、ユダヤ人の諸会堂で神のことばを宣べ始めた。（使13:5）

なるほどローマ1:16が言うように、真っ先にユダヤ人の会堂（シナゴグ）で宣教している。次に向かう町はピシデヤのアンテオケである（使13:2～3のアンテオケとは別の町）。

しかし彼らは、ペルガから進んでピシデヤのアンテオケに行き、安息日に会堂に入って席に着いた。（使13:14）

ここでもユダヤ人の会堂に真っ先に向かっている。その後も、イコニウム（使14:1）、テサロニケ（使17:1）、ペレア（使17:10）、アテネ（使17:17）、エペソ（使18:19）と、パウロが町に着いてまず向かうのはユダヤ人の会堂である。興味深いのは、会堂がなかったピリピの町では、パウロがわざわざ町の外に出て、ユダヤ人が集まりそうな場所まで行ってユダヤ人を探している点である。

安息日に、私たちは町の門を出て、祈り場があると思われた川岸に行き、そこに腰をおろして、集まった女たちに話した。（使16:13）

このように言うと、次の箇所を引用し、歴史的に福音は最初にユダヤ人に伝えられたが、ユダヤ人が福音を拒否したので異邦人に送られたのだという人がいる。パウロはローマのユダヤ人にこう語っている。

「あなたがたは確かに聞きはするが、決して悟らない。…ですから、承知しておいてください。神のこの救いは、異邦人に送られました。彼らは、耳を傾けるでしょう。」（使28:26～28）

..... 8Pへ続く▶

ハーベスト・タイム・ミニストリーズ 佐野 剛史：訳

本記事は、アーノルド・フルクテンバウム博士著『Israelology（イスラエル学）』の日本語訳です。本書は、イスラエルの過去、現在、将来を論じ、これまで組織神学の盲点であったイスラエル論を体系化した先駆的著作です。

【今回の内容】1948年に起こったイスラエル独立は、聖書を信じない人の間でも、現代の奇跡ととらえられることが多い。この歴史上類を見ない大事件を、聖書を信じる神学者はどうとらえているのか。ここでも、神学的立場によって意見が大いに割れている。しかし、同じ神学的立場に立つ人々の間でも、現代イスラエルの位置付けについては意見が一致していない。その混乱を解く鍵は、イスラエルの帰還は「2度ある」と考えることにあり、フルクテンバウム博士は教える。

6. 現代イスラエル

契約神学者は、現代のイスラエル国家をどう考えればよいのかわからず困ってきた。千年期後再臨説のボエットナーと無千年王国説のアリスはこれを否定的にとらえ、反ユダヤ的感情をにじませ、ユダヤ人国家はない方がよい、消滅してしまえばよいというようなことを言っている。千年期前再臨説に立つ契約神学者のラッドもどっちつかずの見解を述べ、神学的にイスラエル国家をどう考えればよいのかわからない状態である。しかし、ディスペンセーションナリストのほとんどは、そのような問題を抱えていない。ダラス神学校のルイス・バービエリ(Louis Barbieri)博士が語った次の言葉が、代表的な見方である。

1948年5月14日は、イスラエル国民全員の心に深く刻みつけられている。この日に、偉大な出来事が起こった。2千年間近く消えていた国が、独立国家として再び出現したのである。……

イスラエルの聖地への帰還は、現代の奇跡である。この出来事は、預言者エゼキエルがキリストの時代の500年以上前にはっきりと預言していたことである。エゼキエル 37 章にはこうある……現代イスラエルの状況は、エゼキエルが幻で見た状況とまったく同じように見える。イスラエルは約2千年間死んでいたが、墓場からよみがえったのである。

イスラエルの霊的状况はどうか。イスラエル民族全体が、国の復興は神の御手が働いたおかげだと認識しているとは到底言いがたい。それは、イスラエル国民で「正統派」に属する人はごく一部で、大部分が「不可知論者」を自認する人々だからである。……圧倒的多数の意見は、イスラエルの復興は人間の手で成し遂げられたもので、神が本当にいたとしても、イスラエルの勝利とはほぼ無関係というものである。この状況も、エゼキエルの預言に合致する。その預言で神は、イスラエルを聖地に連れ

戻した後で、「わたしがまた、わたしの霊をあなたがたの
うちに入れると、あなたがたは生き返る。わたしは、あ
なたがたをあなたがたの地に住みつかせる」（エゼ 37:4）
と言われたからである。今、イスラエルが聖地を所有し
ているが、これは明らかに信仰によるものではない。神
の約束によると、イスラエル民族全体が信仰に入るのは
将来のことである。

バービエリの現代イスラエルに対する見解は典型的なディスペンセーションナリストのそれだが、すべてのディスペンセーションナリストが同じ見解を持っているわけではない。ディスペンセーションナリストの中でも、イスラエル国家を神学的にどう位置づけてよいかわからない人々もいる。問題は、現代イスラエルを取り扱う神学が未発達である点にある。1948年に起こったユダヤ人国家の再興は、無千年王国説の立場を取る人々を混乱させたが、千年期前再臨説に立つ人々にも衝撃を与えた。驚くことに、ディスペンセーションナリストの中には、現在のイスラエル国家は聖書の預言とは無関係だと考える人々がいる。現在のイスラエルが自分の持っている考え方の枠組みにはまらないので、イスラエル国家は単なる歴史の偶然だと片付けるのである。

それでは、どのような理由で、イスラエル国家をそのように片付けてしまうのだろうか。一部のディスペンセーションalistを困惑させているのは、帰還したユダヤ人がイエスに信仰を置いていないだけでなく、正統派のユダヤ教徒でもなかったことである。実際に、帰還民の大部分は無神論者または不可知論者だった。そうすると、イスラエルの帰還について語っている聖書箇所とつじつまが合わなくなる。こうした箇所はすべて、イスラエルは新生を体験した国として描かれており、聖書が語っているそうした姿に現代イスラエルはとうてい当てはまらないからである。こうした理由で、現代イスラエルは預言の成就ではないと片付けられている。

しかし、本当の問題は、預言者が諸国からの帰還は

2度あると預言している点を見過していることにある。最初に、不信仰の民が裁きの準備のために集められる。その裁きとは、大患難時代のことである。その後、信仰ある民が祝福のために集められる。その祝福とはメシア的王国のことである。聖書はそうした2度の帰還を語っているということがわかれば、現在のイスラエルが預言の中でどのように位置づけられているかを容易に理解できる。

裁きの準備のために、不信仰の中で行われる帰還について明確に語っている箇所の一つが、エゼキエル 20:33～38 である。

33 わたしは生きている、——神である主の御告げ。——わたしは憤りを注ぎ、力強い手と伸ばした腕をもって、必ずあなたがたを治める。 34 わたしは、力強い手と伸ばした腕、注ぎ出る憤りをもって、あなたがたを国々の民の中から連れ出し、その散らされている国々からあなたがたを集める。 35 わたしはあなたがたを国々の民の荒野に連れて行き、そこで、顔と顔を合わせて、あなたがたをさばく。 36 わたしがあなたがたの先祖をエジプトの地の荒野でさばいたように、あなたがたをさばく。——神である主の御告げ。—— 37 わたしはまた、あなたがたにむちの下を通らせ、あなたがたと契約を結び、 38 あなたがたのうちから、わたしにそむく反逆者を、えり分ける。わたしは彼らをその寄留している地から連れ出すが、彼らはイスラエルの地にはいることはできない。このとき、あなたがたは、わたしが主であることを知ろう。

この箇所でエゼキエルは、出エジプトをたとえに出して将来に起こる帰還について語っている。出エジプトでは、イスラエルの民全体がエジプトを出てシナイ半島にやってきた。シナイの荒野で神がイスラエルに対して成し遂げようと計画しておられたことが2つあった。一つはモーセの律法を与えることである。もう一つは幕屋を建てることで、律法のかなりの部分はその幕屋を通して実践された。この2つのことを実現した後に、イスラエルの民は約束の地に入るようになっていた。しかし、何度にもわたるつづやきと反抗によって、神はついにご自分の民に裁きを下された。それが起きたのがカデシュ・バルネアという場所で、約束の地の国境となる地点にあった。この裁きによってイスラエルの民は40年間荒野をさまようことになり、その時点で20歳以上の成人だった世代の人々は、ヨシヤとカレブの2人を除き、すべて荒

野で死に絶えた。この裁きの40年後に、エジプトの奴隷としてではなく、荒野で自由人として生まれた世代の国民が、ヨシヤの指導の下で約束の地に入るのである。エゼキエルは、将来にもこれに似たことが起こると語る。神は最初に、全世界に離散したご自分の民を集める。

民が信仰ではなく不信仰の中で帰還することは、この帰還が「力強い手と伸ばした腕、注ぎ出る憤りをもって行う」と言われていることからわかる。このフレーズは、33節と34節で2度繰り返されている。不信仰の中での帰還は、イスラエルの民に対する怒りが注がれた後に起こるのである。

ナチスのホロコーストという火の中からイスラエル国家が誕生したのは偶然ではない。この帰還が起こった後に、神は民を裁かれる。大患難の裁きである。こうした裁きによって、反抗する者は取り除かれていく。そうして、まったく新しくなった国、新生した国がメシアを王に戴くメシア的王国に入ることができるのである。この箇所は、裁きの準備として、不信仰の中で集められる帰還についてはっきりと語っている。

同じ点について語っているもう一つの箇所が、エゼキエル 22:17～22 である。

17 次のような主のことばが私にあった。 18 「人の子よ。イスラエルの家はわたしにとってかなかすとなった。彼らはみな、炉の中の青銅、すず、鉄、鉛であって、銀のかなかすとなった。 19 それゆえ、神である主はこう仰せられる。あなたがたはみな、かなかすとなったから、今、わたしはあなたがたをエルサレムの中に集める。 20 銀、青銅、鉄、鉛、すずが炉の中に集められるのは、火を吹きつけて溶かすためだ。そのように、わたしは怒りと憤りをもってあなたがたを集め、そこにに入れて溶かす。 21 わたしはあなたがたをかり集め、あなたがたに向かつて激しい怒りの火を吹きつけ、あなたがたを町の中で溶かす。 22 銀が炉の中で溶かされるように、あなたがたも町の中で溶かされる。このとき、あなたがたは、主であるわたしがあなたがたの上に憤りを注いだことを知ろう。」

この箇所も、裁きの準備として行われる帰還について語っている。この箇所は特に、不信仰の状態で集められることを、エルサレムに関連付けて明確に述べている。(続く)

LCJE ニュースに連載されてきたフルクテンバウム博士『イスラエル学』が、ハーベスト・タイムから発売されました。

価格は **3,000 円 (税込)** で、ページ数は約 400 ページです。お問い合わせはハーベスト・タイムまで

☎ **055-993-8880** info@harvesttime.tv

イスラエルと教会 ONE NEW MAN

シオンとの架け橋 石井田 直二



2月5日から8日まで、静岡県浜名湖畔で、日本のペンテコステ派の指導者が集まるJPFカンファレンスが開催されました。シオンとの架け橋も出店しましたので、概要をご報告させていただきます。

●企画は1年半前から

JPFカンファレンスは、聖霊派が毎年開催している牧師やリーダーのための聖会で、特にイスラエルに特化した集会ではありません。その集会が今年はイスラエルを主題として取り上げたのは、成長する教会として知られる米国のゲートウェイ教会を通じて、スティーブン・ケイラー師とリバイブ・イスラエルの関係が生まれたからです。

今年の大会の実行委員長であるケイラー師によると、2019年の大会の主題を「イスラエルと教会」にすると、JPF指導者の会議で提案した時には、ほとんど反対意見は出なかったとのこと。カンファレンスの目的に「イスラエルに対する健全な聖書理解」が掲げられ、ユダヤ人と異邦人の双方の講師が招かれた今回の大会は非常に画期的でした。

●イスラエルからの講師

主講師としてイスラエルから招かれたアシェル・イントレーター師は4回にわたってメッセージを語り、パネルディスカッションでは短い証を披露されました。師はハーバード大学を優秀な成績で卒業したあと、人生の目的を見失い、南米の山中で不思議な聖霊体験をして信仰に導かれました。初期のメシアニック・ジューは、聖霊による直接啓示でイエスを信じた人々が多いのです。

メッセージでは、聖書における「契約」の重要性や、イスラエルの回復と教会の回復の関係を語られました。私自身はスケジュールの関係で、3日目夜の再臨のメッセージから聞いたのですが、最初に強調されたのは再臨が私たちの心の中における聖霊の働きという内面的な部分と、エルサレムをめぐる霊的戦いという外面的な部分があるという点。そして、最終日のメッセージは、イスラエル民族が諸民族に「パターン」を示している、との教え。日本民族は、イスラエルの失敗や成功のパターンから学べば、神に与えられたミッションを果たすことができる、という力強いメッセージでした。

また、アシュドドでユダヤ人に伝道を行うイスラエル・ポクター師のメッセージは最前線からの報告と証でした。これも、日本で宣教に挑戦する多くの牧師やリーダーの心をとらえたようです。

また、講師としてプログラムに掲載されてはいませんが、日本語の話せるメシアニック・ジューとして知られるアリエル・ブルーメンソール師や、日本にビジョンを持つデイビッド・トゥルーベック師もそれぞれ証を語りました。

●ウィルクス師の解説も秀逸

一方、非ユダヤ人も講壇に立ちました。ゲートウェイ教会のウェイン・ウィルクス師のメッセージは、使徒行伝15章の通称「エルサレム会議」について。この会議は、

ユダヤ人ばかりだった教会の中に、異邦人信徒が入ってきた事への対応を決めるために開催されました。しかし、その後に教会からユダヤ人がいなくなり、反ユダヤ主義が教会に深く浸透して行くことになりました。とてもバランスが取れ、わかりやすい話だったとのこと。この部分は、ユダヤ人が語るとあまりに非難がましくなるので、やはり異邦人が語るのが良いようです。

また、MJBのニック・レスマイスター師は、分科会でユダヤ人の離散の歴史を簡潔に語って下さったとのこと、とても好評でした。

そして、今回の聖会で特に注目を集めたのが、イスラム教徒からクリスチャンになり、現在は宣教師として活動する女性の証でした。ユダヤ人について語る場合「アラブ人はどうなるのか」という質問がよく出るのですが、抑圧された中でイエスに出会って自由になった女性の証、そして、アラブ人とユダヤ人の和解の時間はとても感動的だったようです。

●出席者数、そして反応は

多くの参加者から「今年はとても盛り上がった。強い聖霊の導きを感じた」等の意見を聞きました。

しかし、イスラエル重視の姿勢には警戒感を持つ人々もあったようで、主催者に聞くと、参加を見合わせた指導者もあったようです。特に、例年は百人以上で日帰り参加される、東海地方のブラジル人教会の方々が、今年はたった十人ほどだったとのこと。イスラエルを取り上げたことも、欠席の理由の一つだったようです。

その一方で、「イスラエルと教会」という主題を見て、常連でない方々も多く大会に参加されたようで「イスラエルがテーマだから、今回は参加した」という声も耳にしました。もちろん、私たちもその仲間です。シオンとの架け橋のブースでは、LCJE日本支部のパンフレットも配布させていただきました。

というわけで、例年とは一部異なる顔ぶれが集まったのですが、大会事務を担当した浜松ツーリストによると、最終日朝の時点で登録者は561人。前年より参加者は少な目だが、宿泊者数は前年より多かったとのことでした。

●イスラエルに対する理解

今回のJPFカンファレンスは、目的にうたわれた「イスラエルに対する健全な聖書理解」に役立ったでしょうか。メッセージ内容は、予備知識の無い人々には多少難しかったかもしれませんが、ペンテコステ派の中でイスラエルに無関心だった人々の目を開く機会になったことは確かでしょう。

しかし、その人々が「健全な聖書理解」を深めるための、たとえば日本語による解説書はどうでしょうか。非常に少ないのが実情です。日本にメシアニック・ジュー運動を紹介してきた、LCJE日本支部、そして私たちの責任は重いと感じつつ、会場を後にしました。



スミルナにある教会が表わす時代を覚え、イスラエルを執り成す

アルコ・イリス・ミニストリーズ代表 早川 衛

先月号にも書かせていただいたとおり、ヨハネの黙示録に記された7つの教会は、教会の7つの型や教会の歴史をも表わすと考えられる。今回は、2番目の教会、スミルナにある教会が表わす時代に生きたユダヤ人に焦点を当ててみたい。その時代を紀元100年から313年頃までと仮定し、話を進めることとする。

紀元130年、エルサレムを訪問したローマのハドリアヌス帝は、エルサレムの再建を宣言した。

しかし、それは、エルサレムをユダヤ人の都として復興するためではなく、ローマ化するためだった。彼は、エルサレムの名をアエリア・カピトリーナとした。アエリアは、ハドリアヌスの家名アエリウスに、そして、カピトリーナは、ローマの主神ユピテルやミネルバ等が座すカピトリヌスの丘にちなむものである。ハドリアヌス帝は、エルサレムの神殿跡地にユピテルの神殿を建設しようとし、ユダヤ神殿の基礎を掘り返した。

そのようなことが引き金となり、紀元132年から135年にかけてユダヤ人の大規模な反乱が起こったのである。反乱のリーダーは、ラビ・アキバがメシアと認定したバル・コクバであった。そのため、この反乱をバル・コクバの反乱と呼ぶ。カシウス・ディオによれば、この反乱によって58万人のユダヤ人が戦死した。ちなみに当時のメシアニック・ジューは反乱に参加しなかった。反乱への参加は、バル・コクバをメシアと認めることを意味したためだ。

この反乱の後、ハドリアヌス帝は、次のような政策を採り、イスラエルからユダヤ性を排除した。(1)地名をパレスチナに変更した(パレスチナとは、かつてユダヤ人の敵であったペリシテ人から採ったもの)。(2)エルサレムにユダヤ人が住むことを禁止し、ユダヤ人の多くを北ガリラヤに送った。(3)エルサレムにハドリアヌス帝の彫像とローマ神を祀った。(4)割礼を違法とし、聖書を焼き、トーラーを公の場で教えることやユダヤ暦の使用を禁止した。

バル・コクバの反乱が終わった紀元135年以降、エルサレム教会のリーダーの中にはユダヤ人以外の名が見られるようになった。これは、ハドリアヌス帝による上記政策の産物のひとつと言えるのかもしれない。

その後、ローマとユダヤ人との間には一種の妥協が見られる時期があった。すなわち、ユダヤ教の公認と、ユダヤ人がローマ皇帝崇拝やローマ神に対する儀式を強要されないことなどである。また、更に後の時代には割礼も認められ、このような状態が、4世紀初頭まで続いた。

紀元306年、コンスタンチヌス一世がキリスト教に改宗し、313年のミラノ勅令によりキリスト教が公認された。そのことにより、キリスト教に対する迫害に終止符が打たれたのである。また、320年には、コンスタンチヌス一世の母ヘレナがエルサレムを巡礼し、イエス・キリストの十字架や埋葬の地を特定した。そして、この巡礼を契機にエルサレムという地名が回復された。

一方、2世紀以上に亘り迫害されたキリスト教がローマの公式宗教となった結果、迫害の矛先は、ユダヤ人に向けられた。そして、誤った神学も生まれた。4世紀、エウセビオスは、聖書の約束はクリスチャンのためであり、ユダヤ人のためではない、また、呪いはユダヤ人のためであると発言した。そして、当時の教会は、自分たちが真のイスラエルであり、神の約束の相続人である、と宣言した。これらの結果として、ユダヤ人の心に、異邦人や教会に対する憎しみや恨みの感情が生まれたことは想像に難くない。

ユダヤ人の中にある憎しみや恨みは、咎あるいは罪と呼ばれるものであり、イザヤ書59章2節のみことばが示すとおり、イスラエルの神である主との間に仕切りを作るものである。その仕切りが取り除かれ、ユダヤ人がイエス・キリストに向くためには、正しい歴史認識に立った執り成しの祈りが必要である。それは、過去を執り成すことである。

主は時の奇跡を行なわれる方である。主はアダムとエバに衣を作られた。それは、皮の衣ではなく革の衣であったのではないだろうか。皮の衣は、すぐに腐ってしまうからだ。皮が革に作り変えられるためには、時間が必要であるが、主は、それを一瞬で行なわれた。また、イエスも水を一瞬のうちに良いぶどう酒に変えられた。それも時の奇跡である。なぜなら、ぶどう酒が良いぶどう酒となるためには、長い時を要するからだ。ヨシュアの時代に、太陽と月がほぼ一日、天に留まった奇跡も、ヒゼキヤ王の時代に日時計が10度後戻りした奇跡も時の奇跡である。

上記に鑑み、ユダヤ人が歴史の中で受けた傷が癒され、イエス・キリストに向くため、我々は、異邦人を代表し、2世紀から4世紀初頭にかけて異邦人が犯した罪(反ユダヤ主義・主の御心に対する無知やそれに基づく言動)を悔い改めるべきである。そして、イスラエルに向けられた呪いや偽りのことば、あるいはそれらによって作られた霊的な悪しき土台、契約、そして関係などが破棄されるように祈るべきである。



ロシア・サハリン宣教への挑戦

表キリスト聖協団札幌教会オリブチャペル 石田 吉男

●福音宣教と神の奇跡

今年のロシア・サハリン宣教は昨年7月12日から21日までの10日間。サハリンに到着したその日は曇り空でとても寒く、出会った人々は一様にダウンコートを身にまとっていました。夏だというのに3日前は3度C、大陸の方では30cmの積雪があったとか。異常気象は日本だけでなく、世界的なレベルで広がっている事を実感させられました。

今回の宣教旅行のメンバーは、特別参加のピーター・ヤモリユック監督、現地コーディネーターのエレーナ・エレーヴァ師、通訳者のジェラルド・グドール師、そして石田の4人。すでに走行距離33万キロに達していたピーター監督の愛車に同乗させていただき、ユジノサハリンスクから一路北上してポロナイスクへ。そこからさらにスミルニフ、そしてサハリン鉄道の最終地点ノグリキに到着。帰路はノグリキから南下して西海岸の町アレキサンドロフスクを経てティモフスク、ポロナイスク、そしてユジノサハリンスクへと戻ったときには、この旅行全体での走行距離は約1700キロに達していました。途方もない長距離を運転してくださったピーター監督の労に、心から感謝します。

この宣教の地であるサハリンのことを考えるときに、いつも脳裏に浮かんでくるのが、ローマ人への手紙1章のみ言葉です。今回はこの個所から、「福音宣教と神の奇跡」というテーマでメッセージをお伝えしたいと思います。

●福音宣教にまず必要なのは「祈り」である

「私が御子の福音を宣べ伝えつつ霊をもって仕えている神があかしてくださることですが、私はあなたがたのことを思わぬ時はなく、いつも祈りのたびごとに、神のみこころによって、何とかして、今度はついに道が開かれて、あなたがたのところに行けるようにと願っています。」（ローマ人への手紙1章9-10節）

使徒パウロは、ローマでの福音宣教のために道を開いてくださるよう、神様に期待して祈り求めています。そこには困難、妨害、危険、その他様々な試練がありました。しかし、決してあきらめず神様に祈り続けた結果、ついにローマへの道が開かれたのです。

今回の宣教旅行でも、ロシア政府から宗教ビザを取得することが必要でしたので、2か月前にビザを申請しました。取得のために支援者の皆様をはじめ、教会員の方々に祈りのサポートをお願いしつつ、自らからも祈り求めた結果、今回もロシア政府からビザが発給され、福音宣教への道が開かれたのです。

その一方で、通訳者のジェラルド・グドール師のビザは99% 絶望と思われる状況でした。それが出発の前日の11日、しかも夕刻に札幌ロシア領事館からビザが発給されたのです。残りの1%の可能性で、神様が奇蹟をなしてくださったのです。皆様のお祈りを心より感謝します。

ロシアでは、伝道規制法によって国内での福音宣教を禁止しています。それなのに、こうして政府から宗教ビザが下りたことを不思議に思い、申請手続き行ってくれたピーター監督に尋ねてみたところ、「ロシア政府がなぜ宗教ビザを発給するのか、その理由は私にもわからない。ただ規則に従って申請しているだけです。それは宣教のための、神様の奇跡としか言いようがありませんね!」とのお返事でした。

伝道規制法の陰で、神様がロシア人を愛しておられ、その救いの為に働いておられることを、移動中の車の中で互いに確認し合い、「アーミン」「アーメン」と高らかにみ名をほめたたえ、心から感謝しました。福音宣教に対する、人の考えを超えた神様のお働きとご配慮、奇蹟を実感させられました。

祈りは、どんな道をも開く大きな力です。福音宣教のために最優先すべきは、祈り求める事。それを通じて神様は必ず道を開き、み心の実現へと導かれるのです。

●福音宣教の一つ目の目的 一相手を励ますこと一

「私があなたがたに会いたいと切に望むのは、御霊の賜物をいくらかでもあなたがたに分けて、あなたがたを強くしたいからです。」（ローマ人への手紙1章11節）

この「あなたがたを強くしているのです。」という部分から、福音宣教は相手の信仰を強くするために行われるものであることがわかります。「強くする」とは、「力づける、堅くする、建て上げる」という意味があります。

パウロは、自分が神様から受けた恵みの福音を語るときに、相手が力づけられ、堅くされ、建て上げられ、聖霊の働きが起きることを信じていたのです。

ユジノサハリンスク、ポロナイスクはもちろんのこと、この度初めて訪れたポロナイスクは北の宣教地であるスミルニフやノグリキ、アレキサンドロフスク、ティモフスクにおいても、それぞれの集会で主のご臨在と聖霊のお働きが豊かにありました。

会衆は感動と喜びに満たされ、笑い、励まされ、御霊によって強められたのです。「こんな遠い所を訪れる人はいないのに、私たちへの愛ゆえに、こうして日本からよく来てくださいました」と、涙と感謝でいっぱい抱きついてくる年配の方々からも、彼らが豊かな慰めと御霊の励ましを受けたことがわかりました。

エレーナ師は次のように言っていました。「サハリンの兄弟姉妹たちは、毎日変わらない生活をしている中で、時にさびしくなり、『自分は忘れられているのではないだろうか』あるいは『自分は誰にも覚えられていないのではないだろうか』などと思うことがあります。サハリンは極東にあり、大陸から離れた島であるから、よけいそう思えるのでしょうか。ですから、そんな日々の中で、こうして皆さんのよ

うに海外から信仰の仲間が訪ねてくることは、彼らにとって何より大きな励ましなんですよ!」

私たちが、少しでもサハリンのクリスチャンの励ましと力になることが出来、うれしく思いました。私たちがこうして、離れていても互いの為に祈り、互いに覚え合うことが出来るのは、なんと幸いなことでしょうか。

●福音宣教の二つ目の目的 一自分が励まされること一

「というよりも、あなたがたの間において、あなたがたと私との互いの信仰によって、ともに励ましを受けたいのです。」
(ローマ人への手紙 1 章 12 節)

福音宣教のもう一つの目的、それは相手に福音を語るだけでなく、相手との交わりを通して自分自身が聖霊の励ましを受けることにあります。

使徒の中の使徒と言われるパウロは、自分が「語る」以上に「聞く」事を大切に、とても謙遜な人でした。

「なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。「義人は信仰によって生きる。」と書いてあるとおりです。」

(ローマ人への手紙 1 章 17 節)

とあるように、いかに「聞く」ということが信仰上大切なことかを強調して教えています。

ポロナイスクからノグリキまでの 300 キロの道のりは砂利道での埃がひどく、一瞬前方が見えなくなってしまうほどでした。そんな中でもハンドルをしっかりと握って運転し続けながらピーター監督はある町での出来事を語ってくれました。ピーター監督が若かりし頃に遭わされた教会で、塀を造る為に庭に積んでいた木材が盗まれてしまいました。幸い小さな町なので、盗みを働いた人物はすぐに判明しました。

ところが、この男性に「この木材は私たちのものです、返してください!」と訴えたところ、「この木材があなたたちの物であるという証拠はどこにあるのか。」と逆に言い返されてしまいました。

「私たちは全能の神に仕えているものです。私たちの神に訴えます。」と、告げると、相手は「嘲笑し、全能の神だって? そんなこと知るものか。訴えるならば訴えているよ。」と。しかしその 3 日後、不思議なことが起こりました。木材を盗んだ先の主人が急死したのです。そして 4 日目の朝、盗まれた木材が教会の庭にそっくり返されていたのです。

「イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。」(マタイによる福音書 28 章 18 節)

と語られたイエス様の事を思い起こされ、ロシアの兄弟姉妹たちの主に対する信頼の大きさを教えられました。

この教会では孤児院を経営していましたが、「子供のために宗教教育はよろしくない。」との理由から閉鎖に追い込まれました。その後、高齢者向けのミニストリーを新たにスタートしました。国が経営するある高齢者施設の 1 階には、何時死んでもおかしくない状態にある重症の人々が入居していました。彼らに向けて週一回、福音を語り始

めたところ、次々に主を受け入れて健康が回復する人々が起こされ、死亡率がすこぶる低下したので、これには国側も驚いていたそうです。現地の教会のこうした証から、改めて福音の素晴らしさを実感し、御霊の力強い励ましを受けました。

●福音宣教の実を結ぶ

「兄弟たち。ぜひ知っておいていただきたい。私はあなたがたの中でも、ほかの国の人々の中で得たと同じように、いくらかの実を得ようと思って、何度もあなたがたのところに行こうとしたのですが、今なお妨げられているのです。」
(ローマ人への手紙 1 章 17 節)

この箇所には「いくらかの実を得ようと思って」と記されていますが、召された宣教師の為に祈り、信徒同士の交わりを通して互いに御霊の励ましを受ける中で、いつか必ず福音の実を結ぶのです。

日本での本格的な福音宣教がスタートしてから 150 年目を迎えました。日本のクリスチャン人口は、カトリック・プロテスタント教会、その他「キリスト」と名の付く教会を含めて 100 万人位と言われております。

しかしある調査によると、洗礼を受けてから教会を離れた人々の数は 300 万人以上とのことです。もちろん、人数が多いから正しい、あるいは人数が少ないから間違っている、というわけではありませんが、教会を離れていく人々のあまりの多さに、驚きと悲しみを禁じえません。

私たちがクリスチャンとして選ばれたこと、その目的は、福音の「実」を結び、その「実」が残ることによって神様が栄光をお受けになることだとすれば、「いくらかの実を得ようと思って」とあるように、福音のために労苦をいとわず奮闘したパウロの姿勢を、私自身が改めて見直すべきであると教えられました。

5 年前にロシア・サハリン宣教への挑戦がスタートしてから、今日まで継続されてきた兄弟姉妹との交流のその先に、夢のような出来事が実現する事を予感しております。もし主がお許しくださるなら、来年の「第十回オリーブチャペル再臨待望聖会」には、サハリンから講師としてピーター・ヤーモリツ監督、通訳としてエレーナ師をお招きするほか、ロシアの兄弟姉妹たちにもご参加いただき、「日露クリスチャン親善大会」が実現することを願っております。

日本のクリスチャンの為に祈る一方で、サハリンのクリスチャンが同じ極東にある日本のリバイバルを祈り求めるとき、あらゆる部族、国語、国民を超えて

「そうして、西のほうでは、主の御名が、日の上るほうでは、主の栄光が恐れられる。主は激しい流れのように来られ、その中で主の息が吹きまくっている。」

(イザヤ書 59 章 19 節)

のみ言葉の実現を夢見て、福音宣教による神様の奇跡が起こることを信じています。ハレルヤ!



しかし、パウロがこういう言葉を語ったのは初めてではない。テサロニケでも、次のように言っている。

しかし、彼ら（ユダヤ人）が反抗して暴言を吐いたので、パウロは着物を振り払って、「あなたがたの血は、あなたがたの頭上にふりかけられ。私には責任がない。今から私は異邦人のほうに行く」と言った。（使 18：6）

同様の言葉は、イコニオムでも語られている（使 13：46）。ここでパウロは、「まずユダヤ人、次に異邦人」というローマ 1：16 の原則に従って宣教を手順どおりに進めているに過ぎない。パウロの宣教は常に次の順序で行われている。（1）町に入る。（2）町のユダヤ人に宣教する。（3）町の異邦人に宣教する。（4）次の町に行く。次の町でも（1）～（4）のプロセスが繰り返される。

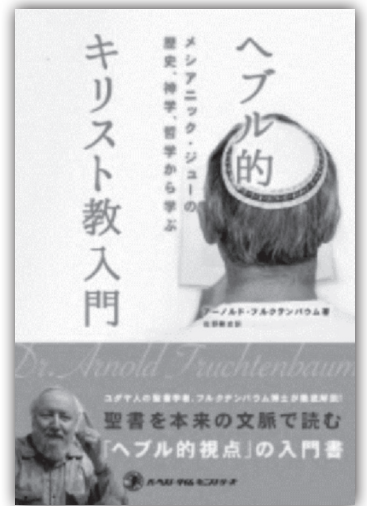
上記の聖句はいずれも（2）から（3）に移行する際の場面で、次の町ではまたユダヤ人に宣教している。

3. 結論

以上、神学（ローマ）と歴史（使徒の働き）の両方で、「福音はまずユダヤ人に」という原則が見られることがわかった。この原則に地理的条件は付いていない。そのため、この日本においても、聖書に従おうとするなら、まずユダヤ人に伝道することがどうしても必要になるのである。

参考文献：

アーノルド・フルクテンバウム著、佐野剛史訳『ヘブールのキリスト教』（ハーベスト・タイム・ミニストリーズ）第 8 章「宣教」



LCJE日本支部事務局レター

LCJE は、ユダヤ人伝道団体の情報交換ネットワークです。加盟しているユダヤ人伝道団体それぞれの立場・活動を尊重して、機関紙などに情報を掲載しています。しかし特定の立場・教理などを、LCJE として支持するものではありません。読者におかれましては、個々の見識によって提供される情報を判断していただきますよう、お願いいたします。

2019年度祈禱会予定

場 所	3月	4月	5月	会 場
大阪 (6:30より)	14日	11日	16日	北浜スクエア (VIP関西センター8F)
東京 (1:30より)	9日	13日	11日	御茶ノ水クリスチャンセンター 8F 811号室

【大阪祈りにご参加される方へ】 第二木曜日午後 6 時半開始です。5月は特別集会を予定していますので第三週目になります。会場は VIP 関西センター 8F です。

【東京祈りにご参加される方へ】 ご注意ください▶通常祈りの会場の、811号室ですが、変更される場合があります。階下の掲示板をご覧ください。

LCJE日本支部2019年1月度会計

収入・献金			支出・現金		
科 目	金 額		科 目	金 額	
献 金	167,000		事 務 費	12,800	
大阪祈り会席上献金	10,000		NEWSレター製作費	50,120	
			郵 送 費	40,500	
			郵便振替手数料	3,060	
			通 信 費	23,500	
			賃 借 ・ 管 理 費	21,600	
			高 熱 費 ・ 共 益 費	9,800	
			交 通 旅 費	7,000	
			広 告 費	0	
			祈 り 会 経 費	4,000	
合 計	177,000		合 計	172,380	
			差 引 残 高	4,620	
前月よりの繰越	185,917		翌月への繰越	190,537	

事務局よりのお知らせ

LCJE 日本支部では、皆様からの声、そして証や、記事の御投稿をお待ちしています。インターネットでの御投稿、原稿用紙での御投稿いずれも大歓迎いたします。文字数は 2000 文字前後でお願いいたします。投稿記事は、封書で送っていただくか、LCJEJAPAN@HOTMAIL.COM 又は FAX 072-867-6721 まで。宜しくお願い致します。

編集後記

コ・ワーカーの皆様お元気にお過ごしでしょうか。今月も興味深い内容のニュースレターをお手元へ届けられる幸いを主に感謝いたします。主イエスの「福音」が今月も一人でも多くのユダヤ人へ届くようにと…お祈りください。イスラエルでは、選挙を前に落ち着きがなくなっています。

政治をつかさどるお一人お一人が力強く、賢く、イスラエルを正しい方向へ導いてくださいますようお祈りください。またテロからの脅威より市民が守られますようお祈りください。まだ主とお会いしていないユダヤ人には一日も早く主とお会いし救い主を受け入れ、救われます様にお祈りください。是非大阪祈り会、東京祈り会へもご出席くださり、イスラエルの平和を執り成しお祈りいたしましょう。

コ・ワーカーお一人お一人に主の祝福がありますように。シャローム
LCJE日本支部事務局長 高瀬真理

LCJE日本支部は、皆様の尊い献金で支えられています。感謝